

新技術 解説

トマト葉かび病に対する有効な SDHI 剤の探索 および高温処理による第一次伝染源の除去

奈良県農業研究開発センター あさの浅野 しゅんすけ峻介・よしだ芳田 かんだい侃大*・ひらやま平山 よしひこ喜彦**

はじめに

トマト葉かび病は *Fulvia fulva* (syn. *Cladosporium fulvum*, *Passalora fulva*) により引き起こされ、国内のトマト生産における主要病害の一つである。本病は主に高湿度となる施設栽培で発生する。分生子は相対湿度 85~100% で発芽し、トマトの葉への侵入条件は湿潤条件下では 10~30℃ である (我孫子・石井, 1986)。第一次伝染源は分生子であり、誘引資材やビニルフィルムに付着してハウス内で長期間残存する (我孫子, 1998; 渡辺ら, 2017)。本病の病徴は葉裏に灰色~オリーブ色の菌叢が生じ、胞子形成が始まると褐色になる。菌叢が生

じた部位の葉表には黄色の斑点が認められる (THOMMA et al., 2005, 図-1)。

国内で栽培されている品種の多くは、葉かび病に対する抵抗性遺伝子である *Cf-2*, *Cf-4*, *Cf-5* または *Cf-9* を保有している。しかし、これらの抵抗性を打破するレースが国内各地で発生したことから (Ima et al., 2015), 殺菌剤への依存度が高まっている。本病に対する薬剤の作用機作は多岐にわたり、SDHI 剤, QoI 剤, DMI 剤, MBC 剤, N-フェニルカーバメートおよび多作用点接触阻害剤が登録されている。しかし、耐性菌の出現によって薬剤の選択が制限される状況にある。耐性菌が確認されているのは、本稿の主題である SDHI 剤に加え、QoI 剤,



図-1 トマト葉かび病の病徴
左：被害株，中央：葉裏，右：葉表。

Selection of Effective Succinate Dehydrogenase Inhibitor (SDHI) Fungicides against *Fulvia fulva* Causing Tomato Leaf Mold and Removal of Conidia as Primary Infection Source by Heat Treatment.
By Shunsuke ASANO, Kandai YOSHIDA and Yoshihiko HIRAYAMA

(キーワード: *Fulvia fulva*, イソフェタミド, 交差耐性, 治療効果, ハウスの閉め切り)

*現所属: 奈良県南部農林振興事務所

**現所属: 龍谷大学農学部